

保育者養成校における歌唱指導のあり方についての考察 (3)
—保育 (表現・音楽) における
弾き歌い時の発声指導に関する取り組み—

A Consideration about the Model of Teaching of Singing
in the School for Training of Nursery Teacher (3)
—Efforts about Teaching of Vocalization
when Singing with Playing the Piano as Nurture (Expression・Music) —

和田 宏一
WADA Hirokazu

キーワード：音楽，音楽教育，保育者養成，歌唱，発声，弾き歌い

Key Words：Music， Music Education， Nursery Teacher Training， Singing， Vocalization，
Singing with Playing the Piano

1. はじめに

筆者は奈良佐保短期大学 (以下、本学とする) 地域こども学科「音楽Ⅱ」および「保育 (表現・音楽)」^{注1)}において、歌唱のクラス授業を担当している。前稿¹⁾では、1年次後期に開講される「音楽Ⅱ」において「自然で楽に歌うための発声法を学ぶ」をテーマに掲げ、「個々の学生が抱える声についての悩み・問題の解決」および「保育者に求められる歌唱表現の習得」を目標とした授業および授業内に実施した歌唱の個人レッスンの実践報告を行った。その結果、学生が歌唱のみ行う場合では一定の成果が認められたが、2年次前期の「保育 (表現・音楽)」において弾き歌いが課題として導入されると、成果があまり活かされず、声は小さく、歌いにくそうに弾き歌いを行う学生が多いことが課題として残った。

一方、先行研究に目を向けると、保育者養成校 (以下、養成校とする) における弾き歌いを扱った研究は多く、国立情報学研究所の論文検索サイト CiNii (NII 学術情報ナビゲータ [サイニイ]) において「弾き歌い」で検索すると 205 件^{注2)}、「弾きうたい」では 2 件^{注3)}、「保育者養成 弾き歌い」では 65 件^{注4)}表示される。しかし、これらの研究は弾き歌い時におけるピアノの指導法について論じられたものが多く、歌唱および発声の指導についての研究は非常に少ない^{注5) 注6)}。歌唱および発声の指導についての研究が少ない理由の一つとして、諸井サチヨは「「弾き歌い」のレッスンを担当する指導者側はピアノの専門家が多く、どうしても指使いや伴奏型などに注意がいきがちのレッスンになってしまう²⁾と指摘している。

養成校において、弾き歌いの指導をピアノ専門の教員が行っているケースが多いことについては本学も同様であり、「保育 (表現・音楽)」における弾き歌いの個人レッスンはピアノを専門とする教員が中心となって行っている。しかしながら、弾き歌いは「ピアノを弾くこと」と「歌うこと」を同時に行うことであり、ピアノ側からの研究も重要ではあるが、歌う側からの研究も同様になされる必要があると筆者は考える。歌う側からの研究の必要性については、伊藤真も「保育における望ましい歌唱活動や歌唱指導を行うために必要な弾き歌い技術の獲得を企図した、歌唱を中心とした弾き歌いの指導に関する研究が必要である³⁾と述べている。

以上を踏まえ、本研究では、「保育 (表現・音楽)」のクラス授業時に「声楽専門教員による弾き歌い個人レッスン」を実施し、学生の弾き歌い時の主として歌いにくさに結びついている問題点を探る。さらに、その問題点に対する指導内容について実践報告を行うことにより、保育者養成校における弾き歌い時の発声指導について一つの方法論を提示することを研究の目的とする。

2. 本研究の対象について

2-1 教科「保育（表現・音楽）」の概要

「保育（表現・音楽）」（以下、本教科とする）は、本学地域こども学科2年次前期に開講され、1年次前期「音楽Ⅰ」および後期「音楽Ⅱ」で学んだピアノおよび歌唱のスキルを活かし、弾き歌いを主な課題とする教科として設定されている。本教科は、主にピアノを専門とする教員による弾き歌いの個人レッスンとML教室^{注7)}における演習授業を組み合わせたもの計45分および411音楽教室^{注8)}における歌唱のクラス授業45分、併せて合計90分にて構成される。筆者はクラス授業（以下、本授業とする）において、1年次後期「音楽Ⅱ」のクラス授業から引き続き「自然で楽に歌うための発声法について学ぶ」をテーマに授業を行っている。

以下に、本研究の対象となる本授業が行われた期間について示す。

年 度：2019年度前期「保育（表現・音楽）」クラス授業

期 間：2019年4月10日～7月25日（但し6月5～20日は教育実習のため休講。教科としては15回設定されているが、うち1回は90分全てを弾き歌いの発表会に充てたため、本授業としては14回行った）

時 限：水曜日2・3限目、木曜日4時限目（1グループ45分、延べ6グループ^{注9)}）

なお、初回授業時点における履修生は57名（男子7名、女子50名）であった。

2-2 声楽専門教員による弾き歌い個人レッスンの概要

本研究における「声楽専門教員による弾き歌い個人レッスン」（以下、本レッスンとする）は、本教科における通常の個人レッスンとは別に行い、本レッスン実施期間中は通常45分のクラス授業を25分程度に短縮し、残る20分でレッスンを行うこととした。1回の本授業におけるレッスン人数は2～3名、学生一人当たりのレッスン時間は7～10分程度である。しかし、7～10分の個人レッスンを1回実施したのみでは、問題点を改善させる目的で行う指導内容について、個々の学生に定着させることは難しい。そのため、本研究ではレッスン期間を2つ設け、学生一人につき2回レッスンを実施することとした。

以下に、本レッスンを行った期間について示す。

第1回：2019年5月8～30日 クラス授業時

第2回：2019年7月10～25日 クラス授業時

各レッスン期間の時期の設定についてであるが、第1回は、通常の個人レッスンを何度か受け、弾き歌いに対するやりにくさを感じ始めたあたりから6月の幼稚園実習^{注10)}までの間に実施することにより、学生が問題意識を持って本レッスンを受けられること、および実習における弾き歌い課題に対応させることが可能であると考えたからである。また、第2回については、7月に入って14回目の本授業までの間に実施することにより、15回目の授業時に行われる発表会^{注11)}に対応させることが出来ると考えたからである。

また、本レッスンは、前稿¹⁾における歌唱の個人レッスンと同様に、本授業を行う411教室に隣接する別室にてマンツーマンにて実施することとした。マンツーマンで行うことにより、他の学生に聴かれることなく安心して弾き歌いできるため、個々の学生の歌唱に関する問題点の発見や改善に向けてのレッスンを円滑に進められることが期待できると考えたからである。

3. 弾き歌いに対する学生の問題意識

本レッスンを実施するにあたり、本教科を履修している学生が、弾き歌いの際、「歌いにくさ」をはじめ、どのような点で「やりにくさ」を感じているのかについて事前に把握することを目的としてアンケートを実施した。実施方法は、全ての履修生が通常の個人レッスンを3回程度経験した後に実施することとし、4月24および25日の授業時にアンケート用紙を配布、授業終了時に回収した。なお、用紙には、アンケート結果は授業改善と研究のみに使用し、その際には個人情報について開示されないことを明記している。以下、結果を表1に示す。

表1 弾き歌いに関するアンケート結果

【1】弾き歌いの課題を演奏することについて、何かやりにくさを感じていますか？ 非常にやりにくい (6) やりにくい (20) 少しやりにくい (18) やりにくさは感じていない (4)	
【2】どのような点で、やりにくさを感じますか？ (複数回答可・【1】でやりにくさは感じていないと回答した者を除く) ピアノを弾くことについて (31) 歌うことについて (32)	
【3】上記【2】の回答について、どのようにやりにくいですか？なるべく具体的に書いてください。	
発声	・声が出ない、出しにくい、声量が小さくなる、大きな声が出せない、歌いにくい (16) ・高い声が出ない、高い声が出しにくい (4) ・プレス(息継ぎ)が難しい、息が続かなくなる (3)
歌唱	・歌詞を忘れる、歌詞を間違えてしまう (7) ・正しい音程で歌えなくなる (3) ・音をドレミで覚えてしまっているため、歌詞を口に出して弾き歌いすることが困難である (2) ・歌がおろそかになっているような気がする (1) ・声がちゃんと出ているかどうか気になる (1)
ピアノ	・歌に気を取られてピアノの音を間違えてしまう (18) ・歌に気を取られてピアノが弾きにくい、弾けなくなる (5)
弾き歌いそのもの	・歌とピアノ、両方同時に意識して弾き歌いすることが難しく、どちらか一方に意識が集中してしまう (11) ・ピアノと歌のタイミングやリズムが合わせづらい (3)
身体	・肩や首が凝る、肩に力が入る (5)
その他	・人前で弾き歌いするとき、すごく緊張して頭の中が真っ白になる (1)
※表中の()は、類似回答の数を示す(以下同様) ※回収枚数：48	

アンケートの回答方法であるが、【1】および【2】については筆者が提示した回答を選択させ、【3】については自由記述とした。

まず、【1】について、弾き歌いの課題を演奏する際、少しでもやりにくさを感じる学生は48名^{注12)}中44名と、全回答者の91.7%を占め、「非常にやりにくい」「やりにくい」を合わせた回答も75%であることから、弾き歌いについてやりにくさを感じている学生が非常に多いことが分かる。次に、【2】において、どのような点でやりにくさを感じるか尋ねたところ、【2】の回答者44名全員がピアノまたは歌唱のいずれかに回答しているが、ピアノと歌唱で回答数がほぼ同じであることが興味深い。なお、【2】は複数回答可としているため、全回答者中43.2%にあたる19名が、ピアノと歌唱、両方にやりにくさを感じていると回答したことになる。また、【3】では、弾き歌いの際に感じるやりにくさについて具体的な回答を求め、その回答をカテゴリー別に分類した。最も回答の多いカテゴリーは「発声」および「ピアノ」に関する項目であり、次に多いカテゴリーは「歌唱」^{注13)}および「弾き歌いそのもの」に関する項目である。なお、【3】について、一人で複数のカテゴリーにまたがって回答した学生も多く見られた。以上の結果から、弾き歌いにおいて「ピアノを弾くこと」と「歌うこと」を同時に行い、そのどちらにも配慮が求められることへの難しさを感じている学生が非常に多いことをあらためて認識させられた。

アンケートの結果をふまえ、本研究においては、主として「発声」および「歌唱」、さらに発声と関連があると思われる「身体」のカテゴリーで回答されたやりにくさについて、その原因と改善方法について考察するが、「ピアノ」に関しても、弾き方が発声・歌唱に影響を及ぼしていると思われる問題点については積極的に取り上げることとする。そして、これらの改善によって「弾き歌いそのもの」のカテゴリーで回答されたやりにくさについても改善の一助となることを期待する。

4. 音楽専門教員による弾き歌い個人レッスンの実施

4-1 第1回弾き歌い個人レッスン

(1) 学生の弾き歌いにおける問題点および対応

「2-2 音楽専門教員による弾き歌い個人レッスンの概要」で示した通り、2019年5月8

～30日の毎授業時、「第1回弾き歌い個人レッスン」を実施し、55名がレッスンを受けた。課題曲については、通常の個人レッスンにおいて課題となっている曲または翌6月の幼稚園実習の課題曲から1曲選択するよう指示し、弾き歌いさせた。最も多く取り上げられた曲は「おかえりのうた」^{注14)}で14名が選択し、次いで「大きな栗の木の下で」^{注15)}「ひげじいさん」^{注16)}を各5名が選択するなど、実習の課題曲と、ピアノが平易で弾きやすい曲が多く選択された。弾き歌いの際の姿勢については、保育の現場においては立位で行うこともあるが、本レッスンは座位にて行った。

なお、レッスンに際しては、個々の学生ごとに「レッスンカルテ」を作成した。カルテには、学生の弾き歌いを聴き、演奏する姿を見て、筆者が気づいた歌唱そのものおよび歌唱に影響を及ぼしていると思われる問題点と、その問題点に対して行った対応について記録を行っている。レッスンカルテに記録した、問題点および問題点への対応に

表2 第1回弾き歌い個人レッスンにおける問題点および対応一覧

	問題点	問題点に対する対応
発声・歌唱	・声小さい(30)	・肩甲骨の周囲、背中、肩の凝りをほぐす ・坐骨を意識して座らせる ・ピアノを弾かない状態で、歌だけ歌わせる ・姿勢に関する問題を伴っている場合が多いので、姿勢について適切と思われる対応を行った(※本表、姿勢の項参照)
	・指が鍵盤から離れるタイミングおよび付点8分音符+16分音符のリズムを刻む際に歌声が途切れる(14)	・ピアノを弾かない状態で、音や歌詞をなめらかに歌わせる ・声が途切れないよう意識させながら、右手メロディと歌で弾き歌いさせる
	・高音がかすれる(11)	・肩甲骨まわり、背中、肩の凝りをほぐす ・鎖骨の下をほぐさせる ・坐骨を意識して座らせる ・姿勢に関する問題を伴っている場合が多いので、姿勢について適切と思われる対応を行った(※本表、姿勢の項参照)
	・下顎に余計な力を入れ、顎の動きを固めて歌っている(2)	・歌詞の発音を柔らかくするように指示 ・各メロディの出だしを柔らかくするように指示
	・鼻から息を吸うことを意識するあまり、息がうまく吸えず呼吸が浅い(1)	・鼻だけでなく、口から吸っても良いということを説明 ・息を意識的かつ懸命に吸っていることも息がうまく吸えない原因であるため、あるメロディを歌って息を出した後、腹部の力を抜いた際に反射的に入る息で次のメロディを歌うよう、呼吸法の指導を行った
	・ポップス系の節回しの癖が強く、歌いだしの音の音程が不正確(1)	・ポップス系の歌い方をする癖があることを伝え、本来より低めの音高からずり上げず普通に歌い出すように指示
音高	・曲全体にわたって音高が不正確(7) ・高い音のみ音高が不正確(1) ・曲の冒頭のみ音高が不正確(1)	・ピアノを弾かない状態で、正しい音高で歌わせる ・音高に注意しながら、右手メロディと歌で弾き歌いさせる
	姿勢	・膝を隙間なく閉じている(5)
・猫背である(5) ・下を向きすぎている、鍵盤を見すぎている(5)		・坐骨を意識して座らせる ・鍵盤を懸命に見すぎないように指示 ・ピアノに近づきすぎたり、まっすぐ前を向くと鍵盤が全く視界に入らない状態であるため、身体を少し後方に移動するよう指示
・椅子に深く腰かけすぎている(3) ・椅子に浅く腰かけすぎている(3)		・深すぎまたは浅すぎる位置に座らないように注意を促す ・坐骨を意識して座らせる
・脇および肘を締めている(3)		・脇および肘の力を抜いて楽にするように指示
・落ち着きがなく、身体が常に揺れている(3)		・なるべく動きを少なくして弾き歌いすることを指示
・上半身が前のめりになっている(1) ・上を向きすぎている(1)		・楽譜を懸命に見すぎないように指示 ・ピアノに近づきすぎたり、鍵盤が全く視界に入らない状態であるため、身体を少し後方に移動するよう指示
ピアノ		・手指、腕に余計な力が入っていて音色が硬い(16) ・ピアノの音量が大きすぎる(8)
	・歌に気を取られてミスタッチが多い(8)	・ピアノを弾かない状態で歌わせる(極力、歌を暗譜で歌えるようになるまで) ・右手メロディと歌で弾き歌いさせる
	・各拍の拍頭にアクセントを付けている(2)	・拍を数えることをあまり意識しないで弾き歌いするように指示
	・ピアノが全く弾けていないので、歌に関するアドバイスができない(2)	・本レッスンの主旨と異なるが、ピアノが弾けるように指導を行った

についての一覧を表2に示す。なお、各表中、最左列は問題点の種別を、問題点の項における()は同一の問題点が見られた学生の数を表している。

(2) 姿勢に関する問題点

本項以降、表2に挙げた問題点についての考察および対応について述べる。表2の冒頭には発声・歌唱に関する問題点の項を設けているが、発声・歌唱における問題点には、姿勢に関する問題点を伴っている事例が多く見られたため、先に姿勢に関する問題点について取り上げる。

姿勢に関する問題点は、「膝を隙間なく閉じている」「猫背である」「下を向きすぎている、鍵盤を見すぎている」の3項目が最も多く、「椅子に深く腰かけすぎている」「椅子に浅く腰かけすぎている」「脇および肘を締めている」「落ち着きがなく、身体が常に揺れている」の4項目が続く。これらを集約すると、「歌うのに不適切な姿勢でピアノの椅子に座っている学生が多い」ということになる。

次に、姿勢に関する問題点を上半身系と下半身系に分けて考察する。まず上半身系の「猫背である」「下を向きすぎている、鍵盤を見すぎている」および少数であるが「上半身が前のめりになっている」は、肩の関節が前方かつ身体の内側に寄ることによって肋骨の動きが制限され、横隔膜の動きが妨げられる^{4) 5)}。同じく上半身系の「脇および肘を締めている」は、腕に余分な力が入るため、腕と骨格で繋がっている鎖骨および肩甲骨の動きが妨げられることにより^{6) 7)}、こちらも肋骨の動きが制限され、横隔膜の動きが妨げられる。次に下半身系である「膝を隙間なく閉じている」は、膝を閉じることにより股関節も閉じるため、骨盤底筋群の柔軟性が減少する⁸⁾。骨盤底筋群は横隔膜と連動していることから、横隔膜の動きも妨げられる^{9) 10)}。ここまで挙げたいずれの場合も、横隔膜の動きが妨げられることにより円滑な呼吸を行うことが妨げられ、そのことが声の出にくさに繋がる¹¹⁾。

以上をふまえた姿勢に関する問題点への対応であるが、その大半において「坐骨を意識して座る」ことを指導したところ、声の出やすさに何らかの改善がみられた。立位では体重は足にかかるが、座位では坐骨に体重がかかるため、坐骨を意識して座ると上体の可動性と安定性が得られ、呼吸、ひいては歌唱の安定にも繋がるためである^{12) 13) 14)}。また、上体の可動性と安定性が得られることは、ピアノの弾きやすさにも繋がる¹⁵⁾。

坐骨を意識して座ることの必要性から考えると、下半身系の問題点のうち、「椅子に深く腰かけすぎている」は、大腿骨に体重がかかり、「椅子に浅く腰かけすぎている」は尾骨に体重がかかるため、いずれも坐骨で体重を支えることが出来ず、不適切な姿勢であるといえる。ゆえに、坐骨を意識して座ることと共に、深すぎる、あるいは浅すぎる位置に座らないよう注意を促した。

(3) 発声・歌唱に関する問題点

次に、発声・歌唱に関する問題点であるが、「声が小さい」が最も多く、次いで「指が鍵盤から離れるタイミングおよび付点8分音符+16分音符のリズムを刻む際に歌声が途切れる」、「高音がかすれる」と続いた。

まず「声が小さい」および「高音がかすれる」については、多くの学生において、肩甲骨の周囲・背中・肩・鎖骨の下部の凝りを伴っていることが確認できた。また、「4-1 (2) 姿勢に関する問題点」で述べた、姿勢に関する問題点を併せ持つケースも多く見られた。ゆえに、凝りについては肩甲骨の周囲・背中・肩をほぐし、姿勢については主として坐骨を意識して座るよう指導したところ、多くのケースで声の出やすさに改善がみられた。

また、「声が小さい」および「高音がかすれる」については、ピアノを弾くことに気を取られていると同時にその曲の歌詞をほぼ覚えていないことが原因となっているケースも多く見られた。このことに関連して、千葉昌哉と渡会純一は「多くの学生が弾き歌いする際、先にピアノを練習し、その後に歌を練習するのであるが、「歌い込みの足りない」学生を多く見かける。(中略) 筆者が本学の練習室を巡回しても、大きな声で

歌っている練習はほとんど見られない¹⁶⁾と述べ、その理由として「①おそらくピアノ演奏の練習が中心となっており、ピアノ系シラバス教員を中心としてピアノ伴奏法をメインで指導していること②防音設備がなく、かつガラス張りで見える状態の部屋で歌うことの抵抗感③歌の音量ならばレッスンのときの勢いでなんとかするのはという学生側の甘さ、などが考えられる¹⁶⁾と指摘しているが、これらの指摘は本学の状況にも当てはまる。そこで、ピアノを弾くことに気を取られていると同時にその曲の歌詞をほぼ覚えていないことが原因と思われるケースについては、その場で筆者が伴奏を弾き、学生に独唱させ、その曲を歌うことに慣れさせること、そして歌唱単独での練習および歌を付けて弾き歌いの練習を行う必要性について指導することで対応した。

次に、「指が鍵盤から離れるタイミングおよび付点8分音符+16分音符のリズムを刻む際に歌声が途切れる¹⁷⁾」についてであるが、まず、この問題を生じるケースが多い曲である「おかえりのうた」の歌の冒頭の楽譜を図1に示す¹⁷⁾。



図1 「おかえりのうた」より抜粋

図1の楽譜について、この旋律をピアノで弾く際は、歌詞「きょー」「すみ」「まし」「なか」「こよ」「かえ」「りま」の7か所において同じ音を連打する必要があるが、多くの学生において、連打しようと鍵盤から指を離す際、同時に声も途切れてしまい、「きょ／おーもたのしくす／みま／した」「な／かよしこ／よしでか／えり／ましょう」のように、本来歌が繋がっているべき箇所にもかかわらず、声が途切れる歌唱が見られた。また、付点8分音符+16分音符によるスキップのリズムにおいて、付点8分音符を跳ねる音であると認識し、ピアノにおいて全ての付点8分音符にスタッカート¹⁸⁾を付ける学生が多いが、その際に指の動きがピアノと連動し、「きょ／おー／もた／のし／くす／みま／した」のように、歌が細切れになって聴こえるケースも見られた。これらの問題は、歌の旋律の聴こえ方が不自然であるだけでなく、この曲では長い方の音符といえる付点8分音符が逐一短く切れてしまうため、全体的に詰まった歌唱に聴こえ、声が硬くなり、声が小さく聴こえることにも繋がる。これらの問題点への対応についてであるが、まずはピアノを弾かない状態でレガート¹⁹⁾を意識して独唱させた。次に、右手のメロディと歌で弾き歌いをさせるのだが、遅い速度で、かつ右手の指を鍵盤から離しても声を途切れさせないことを徹底して練習させた。

(4) 音高（ピッチ）に関する問題点

音高に関する問題点は、本レッスン受講生55名中9名に見られ、「曲全体にわたって音高が不正確」が7名で最も多く、「高い音のみ音高が不正確」「曲の冒頭のみ音高が不正確」が各1名であった。その他の学生については概ね正確な音程で歌えていた。

しかし、これら9名のほとんどは、ピアノを弾かない状態で独唱させると、概ね正しい音高で歌えた。そのことから、音程に関する問題は、「4-1 (3) 発声・歌唱に関する問題点」において述べた、ピアノを弾くことに気を取られていると同時にその曲の歌詞をほぼ覚えていないことが原因となっているケースが多いと考えられる。ゆえに、筆者が伴奏を弾き、学生に独唱させ、その曲を歌うことに慣れさせること、そして歌唱単独での練習および歌を付けて弾き歌いの練習を行う必要性について指導することで対応した。

(5) ピアノに関する問題点

本研究においては、主に弾き歌い時における発声に関する問題を扱うこととしているが、ピアノについては、歌うことの妨げとなっている弾き方について取り上げる必要

があると考えたため、本項を設けた。

ピアノにおける問題で最も多く見られたのが「手指、腕に余計な力が入っていて音色が硬い」で、次いで「ピアノの音量が大きすぎる」「歌に気を取られてミスタッチが多い」と続いた。

まず、「手指、腕に余計な力が入っていて音色が硬い」および「ピアノの音量が大きすぎる」についてであるが、これらは姿勢の項で述べた「脇および肘を締めている」と同様に、手指および腕に余分な力が入るため、腕と骨格で繋がっている鎖骨および肩甲骨の動きが妨げられ、胸郭の動きが制限され、横隔膜の動きが妨げられる。それによってスムーズな呼吸を行うことが困難となり、歌いにくさに繋がる。また、ピアノの音量が過度に大きいことは、歌声を聞こえにくくする。これらの問題点は、ピアノの音を間違えないよう、手指の動きに注意しながら弾く学生に多く見られ、その注意によって手指および腕が緊張し、余計な力が入り、音色の硬さおよび音量の過大に繋がる。そのため、まず腕および肩を楽にさせると同時に、手指については必要以上に力を入れず、柔らかい音色で弾くように指導した。

次に、「歌に気を取られてミスタッチが多い」については、本来であればピアノ専門の教員によって指導されるべき項目かもしれない。しかし、歌に気を取られていることについては「4-1 (3) 発声・歌唱に関する問題点」において述べた、その曲の歌詞をほぼ覚えていないことが原因となっているケースが多く見られたため、やはり筆者が伴奏を弾き、学生に独唱させ、その曲を歌うことに慣れさせること、そして歌唱単独での練習および歌を付けて弾き歌いの練習を行う必要性について指導することで対応した。

また、数は少ないが「各拍の拍頭にアクセントを付けている」ことも問題点として挙げられた。これは、拍頭にあたる音を逐一強く弾くことにより、指でその曲の拍を意識している状態を指すが、拍頭に逐一アクセントを付けて弾くと、つられて歌の方も拍ごとに喉に余分な力が入り、声が硬くなり、出にくさに繋がる。このことについては、拍を数えることをあまり意識しない弾き方を指導することで対応した。

4-2 第2回弾き歌い個人レッスン

(1) 学生の弾き歌いにおける問題点および対応

続いて2019年7月8～25日の毎授業時、「第2回弾き歌い個人レッスン」を実施した。こちらは51名がレッスンを受けている。課題曲については、本教科15回目授業時に実施される発表会において演奏する曲の中から選び、原則として1曲弾き歌いさせた。第2回においても最も多く取り上げられたのは「おかえりのうた」で10名が選択しており、次いで「めだかの学校」^{注20)}「にじ」^{注21)}を各4名が選択したが、発表会に対応させる目的で行ったこともあり、第1回に比べると全体的に難易度の高い曲を選択する学生が多かった。弾き歌いの際の姿勢については今回も座位にて行った。

また、今回も「レッスンカルテ」を作成している。レッスンカルテに記録した問題点および問題点への対応についての一覧を表3に示す。なお、各表中、最左列は問題点の種別を、問題点の項における()は同一の問題点が見られた学生の数を表している。

(2) 第1回レッスンとの相違点

表3の通り、学生の弾き歌いにおける歌唱についての問題点については、第1回における問題点と傾向が類似しており、対応についても概ね第1回と同様の方法で行ったが、以下の4点が第1回と異なっている。

- a) 「発声・歌唱に関する問題点」の「指が鍵盤から離れるタイミングおよび付点8分音符+16分音符のリズムを刻む際に歌声が途切れる」に該当する学生が顕著に増加したこと：

これについては、「4-1 (3) 発声・歌唱に関する問題点」で述べた「おかえりのうた」をはじめ、「さよならのうた」^{注22)}「にじ」といった、同じ音の連打および付点8分音符+16分音符によるリズムを多用する曲を選択する学生が第1回に比べて多かったことが理由として挙げられる。

表3 第2回弾き歌い個人レッスンにおける問題点および対応一覧

	問題点	問題点に対する対応
発声・歌唱	・声が小さい (32)	・肩甲骨まわり、背中、肩の凝りをほぐす ・坐骨を意識して座らせる ・座位にてピアノを弾かない状態で歌わせる ・姿勢に関する問題を伴っている場合が多いので、姿勢について適切と思われる対応を行った (※本表、姿勢の項参照)
	・指が鍵盤から離れるタイミングおよび付点8分音符+16分音符のリズムを刻む際に歌声が途切れる (19)	・ピアノを弾かない状態で、音や歌詞をなめらかに歌わせる ・声が途切れないう意識させながら、右手メロディと歌で弾き歌いさせる
	・高音がかすれる (3)	・肩甲骨まわり、背中、肩の凝りをほぐす ・鎖骨の下をほぐさせる ・坐骨を意識して座らせる ・姿勢に関する問題を伴っている場合が多いので、姿勢について適切と思われる対応を行った (※本表、姿勢の項参照)
	・各メロディの歌い始めの声質が硬い (2) ・下顎に余計な力を入れ、顎の動きを固めて歌っている (1) ・全体的に声質が硬い (1)	・歌詞の発音を柔らかくするように指示 ・各メロディの出だしを柔らかくするように指示
音高	・高い音のみ音高が不正確である (4) ・曲全体にわたって音高が不正確である (3) ・曲の冒頭のみ音高が不正確である (1) ・付点8分音符+16分音符のリズムにおいて、付点8分音符の音高が不正確である (1)	・筆者がメロディを弾いた状態で、正しい音高で歌わせる ・筆者がメロディを弾いた状態で、速度を落としてゆっくり歌わせる ・音高に注意しながら、右手メロディと歌で弾き歌いさせる
	・膝を隙間なく閉じている (5)	・膝を完全には閉じず、少し間を空けるように指示 ・坐骨を意識して座らせる
	・下を向きすぎている、鍵盤を見すぎている (4) ・猫背である (1)	・坐骨を意識して座らせる ・鍵盤を懸命に見すぎないように指示 ・ピアノに近づきすぎており、まっすぐ前を向くと鍵盤が全く視界に入らない状態であるため、身体を少し後方に移動するよう指示
	・脇および肘を締めている (3)	・脇および肘の力を抜いて楽にするように指示
	・拍ごとに首および肩を上下に振っている (3)	・拍ごとに首および肩を振らないように指示
	・上半身が前のめりになっている (2)	・楽譜を懸命に見すぎないように指示 ・ピアノに近づきすぎており、鍵盤が全く視界に入らない状態であるため、身体を少し後方に移動するよう指示
ピアノ	・手指、腕に余計な力が入っていて音色が硬い (22) ・ピアノの音量が大きすぎる (11)	・手指、腕、肩の力を抜くように指示 ・柔らかい音色で弾くように指示
	・歌に気を取られてミスタッチが多い (4)	・ピアノを弾かない状態で歌わせる (極力、歌を暗譜で歌えるようになるまで) ・右手メロディと歌で弾き歌いさせる
	・曲を弾く速度が速すぎる (1)	・適切な速度まで落として弾き歌いするように指示

- b) 「「ピアノに関する問題点」の「手指、腕に余計な力が入っていて音色が硬い」に該当する学生が顕著に増加したこと」:
 こちらの理由についても、a)と同様に、第1回に比べ難易度の高い曲を選択した学生が多かったため、同じ音の連打の問題および音のミスを防ごうとして、手指・腕が緊張するケースが増えたためではないかと推察する。
- c) 「「発声・歌唱に関する問題点」における「声が小さい」について、「座位にてピアノを弾かない状態で歌わせる」対応を新たに取り入れたこと」:
 第1回レッスンにおいてピアノを弾かずに歌を練習させる場合、その曲を歌うことに慣れさせる目的から立位で歌わせたが、本レッスンは2回とも座位で弾き歌いを行うため、ピアノを弾かずに歌を練習させる場合においても座位で歌わせた方が弾き歌い時の歌唱に直接結びつくのではないかと考えたためである。
- d) 「「音高(ピッチ)に関する問題点」全般において「筆者がメロディを弾いた状態で、速度を落としてゆっくり歌わせる」を新たに取り入れたこと」:

筆者がピアノでメロディを弾いて示す音に合わせてゆっくり歌わせることにより、より確実に音高を認識することが出来ることを期待した。

5. 声楽専門教員による弾き歌い個人レッスンの成果—アンケートを通して—

5-1 弾き歌い個人レッスンおよび発表会后アンケートの実施

本レッスンにおける成果を確認することを目的として、2回の個人レッスン終了時および15回目の授業で行った発表会終了時に、それぞれレッスンを受けた学生を対象にアンケートを実施した。実施方法であるが、「第1回弾き歌い個人レッスン後アンケート」については、レッスンが終了した際、その場で個別にアンケート用紙を手渡しし、記入が済み次第回収した。「第2回弾き歌い個人レッスンおよび発表会后アンケート」については、第2回個人レッスンと発表会で用紙を一枚にまとめたため、まず第2回個人レッスンが終了した際その場で個別にアンケート用紙を手渡しし、記入が済み次第いったん回収した。その後発表会において全ての学生の演奏が終了した直後に同じ用紙を再度配布し、記入が済み次第回収するという方法を取った。なお、アンケート結果については授業改善と研究のみに使用し、その際には個人情報について開示されないことを口頭にて説明している。以下、第1回弾き歌い個人レッスン後アンケートの結果を表4に、第2回弾き歌い個人レッスンおよび発表会后アンケートの結果を表5に示す。

表4 第1回弾き歌い個人レッスン後アンケート結果

	どのような変化が起こったか (複数回答可)
歌唱	・声が出やすくなった (40) 高い声が出やすくなった (8) ・音程が合いやすくなった (5) ・低い声が出やすくなった (2) ・特に変化を感じなかった (3)
ピアノ	・ピアノが弾きやすくなった (38) ・肩、首、背中の凝りや痛みが緩和された (14) ・手や腕の痛みが緩和された (4) ・特に変化を感じなかった (8)
	上記以外に何か感想があれば書いてください (自由記述)
	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノにつられて声途切れていることが分かったので意識して直したい (3) ・右手と歌だけで練習すると歌が歌いやすくなって音程も取りやすくなった (2) ・姿勢の大切さが分かった (2) ・凝っている箇所をほぐしたら声がかすれにくくなったので、歌う前はストレッチをした方が良かったと思った ・鍵盤を見すぎないように気をつけると少し声が出るようになった ・姿勢を変えるだけで歌いやすくなった ・声がかすれにくくなった ・歌詞とピアノの音をしっかりと覚えることが良かったと思った ・ピアノの音量を抑えるのが難しかった ・リラックスしてピアノが弾けるようになった ・練習の仕方が分かった ・弾き歌いが少しやりやすくなった
	※回答枚数：50枚

表5 第2回弾き歌い個人レッスンおよび発表会后アンケート結果

	【レッスン終了時】どのような変化が起こったか (複数回答可)
歌唱	・声が出やすくなった (45) 高い声が出やすくなった (16) ・音程が合いやすくなった (4) ・低い声が出やすくなった (1) ・特に変化を感じなかった (0)
ピアノ	・ピアノが弾きやすくなった (26) ・肩、首、背中の凝りや痛みが緩和された (23) ・手や腕の痛みが緩和された (8) ・特に変化を感じなかった (3)
	【発表会終了時】発表会において、声楽専門教員の個人レッスンを受けたことによる成果は反映されていたと思うか
	<ul style="list-style-type: none"> ・大いに反映されていた (18) ・ある程度反映されていた (17) ・少し反映されていた (9) ・反映されなかった (1) ・未回答 (4)
	※回答枚数：49枚

アンケートの回答方法であるが、質問のうち「個人レッスンを受けたことにより、どのような変化が起こったか」「発表会において、声楽専門教員の個人レッスンを受けたことによる成果は反映されていたと思うか」については筆者が提示した回答を選択させ、第1回弾き歌い個人レッスン後アンケートにおける「上記以外に何か感想があれば書いてください」については任意かつ自由記述とした。なお、それぞれのアンケートにおいて、歌唱のみでなくピアノの項目を設けたことについては、歌いやすさに主眼をおいたレッスンを行うことが、ピアノの弾きやすさにどのくらい影響を与えていることを調べることを目的としたため

ある。以下、両アンケートの結果について考察する。

5-2 アンケート結果についての考察

(1) 「歌唱」 カテゴリー

まず「歌唱」カテゴリーにおいては、「声が出やすくなった」は、第1回では回答者50名中40名が、第2回では49名中45名が回答している。また、「高い声が出やすくなった」については、第1回では8名であったが第2回では16名と倍増している。「特に変化を感じなかった」については第1回で3名が回答したが、第2回では0であった。以上から、発声・歌唱については多くの学生が改善を実感したといえる。

(2) 「ピアノ」 カテゴリー

次に「ピアノ」カテゴリーであるが、「ピアノが弾きやすくなった」について、第1回では38名、第2回では26名と、比較的多くの学生が回答していることが興味深い。発声・歌唱について改善する目的でレッスンを行うことで、ピアノの弾き方も改善できることを多くの学生が実感したといえる。なお、第2回で回答が26名に減少したことについては、第1回に比べて難易度の高い曲を選択する学生が多かったため、個々の学生のピアノの技術面における問題が影響したのではないかと推察する。

また、同カテゴリーにおいて「肩、首、背中の凝りや痛みが緩和された」は第1回で14名、第2回で26名が回答し、「手や腕の痛みが緩和された」は第1回で4名、第2回で8名が回答している^{注23)}。姿勢およびピアノの弾き方を改善することで、身体に起こっている凝りや痛みも改善できることを実感した学生が多かったといえる。また、この2つの回答についてはいずれも第2回で顕著に増加しているが、このことについては、第2回で選択した曲について、音を間違えることなく弾くことに学生が苦心して手指および腕・肩に余分な力が入り、鍵盤または楽譜を懸命に見ることによって不適切な姿勢を取っていたことが考えられる。

(3) 第1回弾き歌い個人レッスン後アンケートにおける自由記述

第1回のアンケートでは、筆者が提示した回答以外の感想について自由記述（任意）で求めたが、「ピアノにつられて声途切れていることが分かったので意識して直したい」「右手と歌だけで練習すると歌が歌いやすくなって音程も取りやすくなった」「歌詞とピアノの音をしっかり覚えることが良いと思った」「練習の仕方が分かった」と、弾き歌いについて様々な練習方法を提示されたことに対する記述が多く挙がったことが特徴である。この点について、歌う側の視点から弾き歌いのレッスンを行うことの必要性を学生も認識した結果であったといえる。次いで、「姿勢の大切さが分かった」「凝っている箇所をほぐしたら声がかすれにくくなったので、歌う前はストレッチをした方が良いと思った」「鍵盤を見すぎないように気をつけると少し声が出るようになった」「姿勢を変えるだけで歌いやすくなった」と、姿勢および身体の使い方に関する記述がみられたが、こちらについては、姿勢および身体の使い方を改善することによって声が出やすくなることを実感した結果であるといえる。

(4) 発表会終了時

発表会終了時に、「発表会において、声楽専門教員の個人レッスンを受けたことによる成果は反映されていたと思うか」との問いについて回答を求めた。結果、「大いに反映されていた」が18名、「ある程度反映されていた」が17名、「少し反映されていた」が9名と、回答した45名^{注24)}中44名が試験での演奏に本レッスンが活かされていることを実感している。

しかし筆者は、「ある程度反映されていた」「少し反映されていた」が合わせて26名と、弾き歌い個人レッスン後アンケートの結果と比べて控えめな回答が多いことにあえて注目したい。本レッスンの際に問題点あまりみられなかった学生および本レッスンで問題点に改善が見られた学生について、発表会では本レッスンの成果があまり発揮できていないと思われる演奏が多かったことが残念であった。このことについては、発表会において、本教科を共に受講している学生たちにピアノおよび自分の歌声を

聴かれることに対する緊張が多く、多くの学生で見られたこと、またピアノの音を間違えないように留意したため手指および腕・肩に力が入っている学生も多く見られたことが理由であると推察する。緊張によって学生自身の本来の実力が発揮できないことは仕方のない面もあるが、今後の課題の一つであると考えている。

6. まとめと今後の課題

本研究では、「保育（表現・音楽）」のクラス授業において「声楽専門教員による弾き歌い個人レッスン」を実施し、学生の弾き歌い時の主として歌いにくさに結びついている問題点を探り、その問題点に対する指導内容について実践報告を行うことにより、保育者養成校における弾き歌い時の発声指導について一つの方法論を提示することを研究の目的とした。

まず、本レッスンの実施によって明らかとなった問題点および問題点への対応についての考察をまとめると、以下の通りである。

a) 姿勢についての問題

- ・姿勢における様々な問題点を集約すると「歌うのに不適切な姿勢でピアノの椅子に座っている学生が多い」となるが、大半のケースにおいて「坐骨を意識して座る」ことを指導したところ、声の出やすさに改善がみられた。

b) 発声・歌唱および音高についての問題

- ・「声が小さい」および「高音がかすれる」については、多くの学生において、肩甲骨の周囲・背中・肩・鎖骨の下部の凝りを伴っており、これらの凝りをほぐすことによって、声の出やすさに改善がみられた。
- ・発声および歌唱についての問題点には、姿勢の問題を伴っているケースが多く見られた。
- ・また、ピアノの練習にばかり注意が向いており、レッスンの課題曲を歌うことに慣れていないゆえに「声が小さい」「音高が不正確である」といった問題に繋がるケースも多く、これらについて、ピアノを弾かずに一人で歌う練習、および右手のメロディと歌のみで弾き歌いする練習を取り入れることで対応した。

c) ピアノについての問題

- ・弾き歌いにおいては、ピアノの弾き方も発声・歌唱に影響を与えているため、ピアノの弾き方の改善によって声が出やすくなるケースが多く見られた。
- ・上記とは逆に、発声・歌唱について改善する目的でレッスンを行うことが、ピアノの弾き方を改善することにも繋がることを多くの学生が実感した。

以上の考察により、本研究における目的はある程度達成でき、また、歌う側からの研究、ならびに声楽専門教員による弾き歌いの個人指導の必要性は高いということがあらためて認識できたといえる。しかし、「弾き歌い」は「ピアノを弾くこと」と「歌うこと」という2つの動作を同時に行うことから、本研究において挙げた以外の問題が潜んでいる可能性が高いことと、「5-2 (4) 発表会終了時」の項で述べた通り、発表会において、緊張が影響しているとはいえ本レッスンの成果があまり発揮できていないと思われる演奏が多かったこと、これら2点から、弾き歌い時の発声・歌唱を中心とした指導について、さらなる研究が必要であることを実感した。

今後の課題としては、授業および本レッスンで指導した内容および指導によって改善が見られた問題点について、それらをいかに学生に定着させるかをテーマとする研究が必要であると考えられる。「5-2 (3) 第1回弾き歌い個人レッスン後アンケートにおける自由記述」で述べた通り、多くの学生は弾き歌いにおける適切な練習方法についての情報が乏しく、「とりあえず音を間違えないようにピアノを弾く」ことが練習の主な目的となっており、歌のみの練習、歌を伴った練習を行っている学生は少ない。ゆえに、弾き歌い時の発声・歌唱を中心とした指導に関する研究をさらに進め、適切な練習についての方法論の提示を積極的に行っていきたい。また、前稿¹⁾でも述べたように、数名の学生をピックアップし、それぞれに個人レッスンを継続して行うことで、さらなる問題点の掘り起こしを行う事例研

究も必要であると考えている。

以上、保育者養成校における弾き歌い時の、歌う側、すなわち声楽専門教員による指導のあり方について、継続して研究を行うことを今後の展望とし、本研究の締めとする。

注釈

注 1) 2019 年度入学生から「保育内容（表現・音楽）」として開講される。

注 2) 国立情報学研究所:「CiNii Articles - 日本の論文をさがす」「弾き歌い」, <https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E5%BC%BE%E3%81%8D%E6%AD%8C%E3%81%84&range=0&count=20&sortorder=1&type=0> (2019.11.21)

注 3) 注 2) と同様、「弾きうたい」, <https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E5%BC%BE%E3%81%8D%E3%81%86%E3%81%9F%E3%81%84&range=0&count=20&sortorder=1&type=0> (2019.11.21)

注 4) 注 2) と同様、「保育者養成 弾き歌い」, <https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E4%BF%9D%E8%82%B2%E8%80%85%E9%A4%8A%E6%88%90%E3%80%80%E5%BC%BE%E3%81%8D%E6%AD%8C%E3%81%84&range=0&count=20&sortorder=1&type=0> (2019.11.21)

注 5) CiNii において「弾き歌い ピアノ」で検索すると 116 件^{注 25)} 表示されるが、「弾き歌い 発声」で検索した場合は 6 件^{注 26)}、「弾き歌い 歌唱指導」では 5 件^{注 27)}、「弾き歌い ヴォイス」では 1 件^{注 28)} と、弾き歌いにおける歌唱および発声についての研究が非常に少ないことが分かる。

注 6) このことについて、千葉と渡会は「「弾き歌い」に関する先行論文は多いが、声楽中心のものは見られず、ピアノ伴奏法もしくはピアノ演奏に関する物が多かった」¹⁶⁾、松本晴子は「弾き歌いについては、ピアノ伴奏に着目した調査や研究が多いように見受けられる」¹⁷⁾ と指摘している。

注 7) 電子ピアノが 20 台設置されており、ピアノの一斉指導および練習が行える音楽教室である。

注 8) 教室の前方はグランドピアノが 2 台対面で設置されている。本授業においてはピアノの周囲に椅子を配する座席配置を採用しているが、通常配置ではピアノの側方に長机が横 3 列、縦 4～5 列並べられ、長机 1 台につき椅子が 3 脚配されている。

注 9) 1 コマでは、前半：クラス授業と後半：ピアノの個人レッスン+演習授業を受けるグループと、前半：ピアノ+演習授業と後半：クラス授業を受けるグループが存在するため、2 つのグループに 45 分ずつクラス授業を行っている。

注 10) 地域こども学科こども保育コースの場合。同学科こども教育コースにおいては同じ時期に小学校での教育実習が実施される。

注 11) 発表会は 15 回目の授業時に行われ、各々の学生は、当該時限を担当する全ての音楽教員および当該時限を履修する全ての学生の前で課題曲を弾き歌いする。なお、15 回目の授業については 90 分全てを発表会に充てている。

注 12) 当該アンケート実施日は欠席者が多かったため、初回授業時の履修者 57 名に比して 48 名と回答枚数が少ない。

注 13) この場合、「歌唱」とは、発声以外で歌に関する事項を指す。

注 14) 日本の幼児教育分野で初めてリトミックを提唱した天野蝶 (1891-1979) が作詞、「子供のバイエル」を編纂した一宮道子 (1897-1970) が作曲した。1949 年の『うたとゆうぎ』において、初めて掲載された^{18) 19)}。

注 15) 作詞者および作曲者不詳、イギリス民謡「Under the Spreading Chestnut Tree」にジェスチャーを付けて歌われていたものが戦後 GHQ によって日本に伝わったといわれている。日本では NHK のテレビ番組で「うたのおじさん」として出演していた友竹正則 (1931-1993) が伝え聞き、あそびの動作をつけて放送したところ、全国の幼稚園や保育園に浸透していった²⁰⁾。

注 16) 5 つの音を指の形であらわす「ゆびあそび」という曲名で玉山英光 (1912-1989) が発表したものをアレンジして歌や動作を加えたもの。作詞者は不明である²¹⁾。

- 注 17) 本学の音楽科目において用いている童謡の楽譜²²⁾を元に、楽譜作成ソフト「Finale26」を用いて筆者が作成した。
- 注 18) 音と音を切り離して奏することで、音と音の間に楽譜に書かれていない休止が入ることをいう²³⁾。
- 注 19) 音の間を切れ目なく、なめらかに奏することを指す音楽用語である²⁴⁾。
- 注 20) NHK の幼児番組に「春らしくのんびりした明るい歌」を依頼された茶木滋 (1910-1998) が作詞、作曲は中田喜直 (1923-2000) が行い、1951 年 NHK ラジオ『幼児の時間・歌のおけいこ』で発表された²⁵⁾。
- 注 21) 新沢としひこ (1963-) 作詞、中川ひろたか (1954-) 作曲。『月刊音楽広場：子どもと音楽を遊ぶ』(クレヨンハウス刊)において、1991 年に発表された²⁶⁾。
- 注 22) 「たきび」の作曲者でもある渡辺茂 (1912-2002) が作曲。作詞の高すすむは、渡辺のペンネームである²⁷⁾。
- 注 23) この 2 項目について、「3. 弾き歌いに対する学生の問題意識」における表 1 では「身体」のカテゴリーに含めたが、姿勢だけでなくピアノの弾き方もこれらの症状に深く関わっていることから、本項における両アンケートでは「ピアノ」のカテゴリーとして提示した。
- 注 24) 受講者は 55 名であるが、学生側の事情により発表会を異なる日に受けた学生について、発表会後のアンケートが実施できなかったため、10 名の未回答が生じた。
- 注 25) 注 2) と同様、「弾き歌い ピアノ」, <https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E5%BC%BE%E3%81%8D%E6%AD%8C%E3%81%84%E3%80%80%E3%83%94%E3%82%A2%E3%83%8E&range=0&count=20&sortorder=1&type=0> (2019.11.21)
- 注 26) 注 2) と同様、「弾き歌い 発声」, <https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E5%BC%BE%E3%81%8D%E6%AD%8C%E3%81%84%E3%80%80%E7%99%BA%E5%A3%B0&range=0&count=20&sortorder=1&type=0> (2019.11.21)
- 注 27) 注 2) と同様、「弾き歌い 歌唱指導」, <https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E5%BC%BE%E3%81%8D%E6%AD%8C%E3%81%84%E3%80%80%E6%AD%8C%E5%94%B1%E6%8C%87%E5%B0%8E&range=0&count=20&sortorder=1&type=0> (2019.11.21)
- 注 28) 注 2) と同様、「弾き歌い ヴォイス」, <https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E5%BC%BE%E3%81%8D%E6%AD%8C%E3%81%84%E3%80%80%E3%83%B4%E3%82%A9%E3%82%A4E3%82%B9&range=0&count=20&sortorder=1&type=0> (2019.11.21)

参考・引用文献

- 1) 和田宏一：「保育者養成校における歌唱指導のあり方についての考察 (2)：音楽Ⅱのクラス授業における取り組みについて」、『奈良佐保短期大学研究紀要』, 26, pp.41-53 (2019)
- 2) 諸井サチヨ：「保育者養成校における歌唱指導について：学生の歌うことに関する意識調査をもとに」、『淑徳大学短期大学部研究紀要』, 56, p.154 (2017)
- 3) 伊藤真：「保育学生のピアノ弾き歌いにおける歌唱能力に関する基礎的研究：立位と座位姿勢間の歌唱可能声域の比較」、『音楽文化教育学研究紀要』, 21, p.12 (2009)
- 4) 川井弘子：『うまく歌える「からだ」のつかいかた：ソマティクスから導いた新声楽教本』, 誠信書房, pp.62-63 (2015)
- 5) バーバラ・ユナブル著；小野ひとみ訳：『音楽家ならだれでも知っておきたい「呼吸」のこと：豊かに響き合う歌声のために』, 誠信書房, pp.20-25 (2004)
- 6) バーバラ・ユナブル著；片桐ユズル, 小野ひとみ訳：『音楽家ならだれでも知っておきたい「からだ」のこと：アレクサンダー・テクニクとボディ・マッピング』, 誠信書房, p.16 (2000)
- 7) トーマス・マーク著；小野ひとみ監訳；古屋晋一訳：『ピアニストならだれでも知っておきたい「からだ」のこと』, 春秋社, pp.74-76 (2006)
- 8) 4) と同書, p.64

- 9) 6) と同書, pp.30-31
- 10) 4) と同書, pp.70-72
- 11) 4) と同書, pp.68-70
- 12) 和田宏一:「保育者養成校における歌唱指導のあり方についての考察(1): 教員免許状更新講習を通して」, 『奈良佐保短期大学研究紀要』, 25, p.59 (2018)
- 13) 6) と同書, pp.30-31
- 14) ナガイカヤノ:『演奏者のためのはじめてのボディ・マッピング: 演奏もカラダも生まれ変わる』, ヤマハミュージックメディア, pp.116-118 (2017)
- 15) 6) と同書, pp.54-59
- 16) 千葉昌哉, 渡会純一:「声楽的見地における学生の弾き歌いに関する提言:「表現技術Ⅱ(音楽)」声楽系シラバス履修学生の調査から」, 『教職研究』, 東北福祉大学教職課程支援室, 2016, p.142 (2017)
- 17) 松本晴子:「手遊び歌と弾き歌いをどのようにうたうか: 保育者養成における指導への提言」, 『音楽教育実践ジャーナル』, 8 (1), p.94 (2010)
- 18) 西澤志穂:「幼児の音楽表現における付点8分音符+16分音符のリズム」, 『東洋大学大学院紀要』, 54, p.329 (2017)
- 19) 中山寛子:「リトミックに関する研究Ⅰ: 天野式リトミック指導者養成講座内容をふまえて」, 『東北女子大学・東北女子短期大学 紀要』, 52, p.135 (2013)
- 20) 長田暁二:『心にのこる日本の歌 101 選』, ヤマハミュージックメディア, p.43 (2007)
- 21) 奥村美恵子, 田中英夫編著:『あそび歌うた遊び: 幼児保育のためのテキスト』音楽之友社, p.48 (1997)
- 22) 小林美実編:『こどものうた 200』, チャイルド本社, p.64 (1975)
- 23) 菊池有恒:『楽典: 音楽家を志す人のための』, 音楽之友社, p.170 (1979)
- 24) と同書, pp.165-166
- 25) 20) と同書, p.193 (2007)
- 26) 五味太郎絵; 新沢としひこ作詞; 中川ひろたか作曲; 増田裕子編曲:『あしたが好き(絵本 SONG・BOOK5)』, クレヨンハウス, pp.14-15, 46-47 (1992)
- 27) 島崎篤子:「「たきび」の作曲者・渡辺茂の業績: 作曲家と教師としての活動に焦点を当てて」, 『文教大学教育学部紀要』 50, pp.103-120 (2016)